

WELCOME STRANGER TO THIS PLACE

ハンドアウト完全版はこちらの
QR コードからお読み頂けます。



2021. 3. 20 Sat - 4. 7 Wed

10:00 - 18:00(入場は閉館の 30 分前まで) 月曜閉館 / 入場無料 / 要予約

ごあいさつ

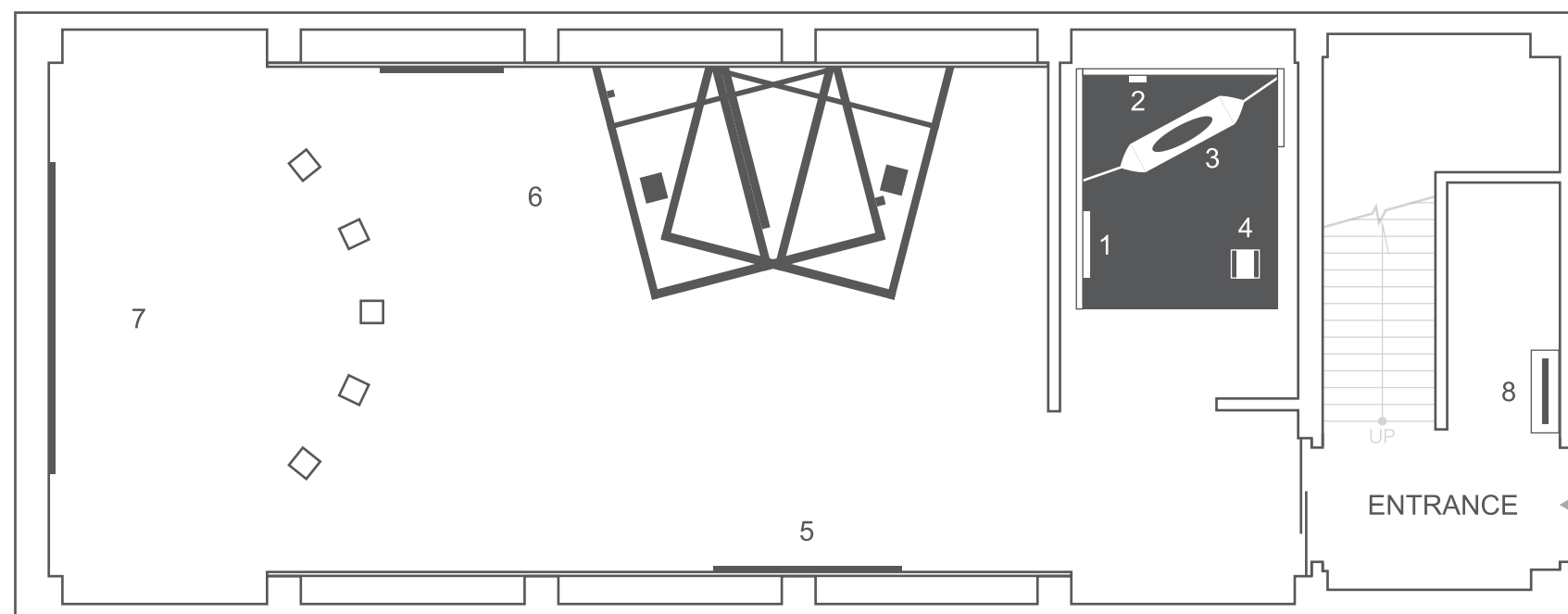
本展覧会は、2016 年に設立された東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科（GA）アートプロデュース専攻キュレーション領域の長谷川祐子教授の授業として実施される 本年で 5 年目をむかえるプロジェクトです。本年度の企画では、フィリピン、中国、ロシア、サウジアラビア、そして、日本など多様な文化的背景をもつ学生たちの共同キュレーションによって、本展覧会「Welcome, Stranger, to this Place」を開催致します。

私たちが「見知らぬもの (=stranger)」と見做すもの、それは一体なんでしょうか。初めて出会うものや知らなかったことに対する認識とするならば、今日私たちの前に現れた未知のウイルスもまた、その一つかもしれません。ウイルスの存在は、私たちの身近で慣れ親しんだ環境を一変させました。その環境に戸惑う我々も「不慣れな人 (=stranger)」と言えるでしょう。

世界中に拡がった新型コロナウイルスの脅威と、それに対抗するための様々な新しいルールによって、人々の居場所は同時代的に大きな変容を余儀なくされました。こうした状況は、私たちにとって「見知らぬもの (=stranger)」への認識のあり方を再確認する契機となりました。遠く離れた場所への移動が制限され、さらに自らの足下すらも不安定なものであることが明らかになったいま、私たちは、実際にその土地に足を運ぶのではない別のやり方で、離れた場所の記憶や物語を知るための方法を希求しています。

本展において私たちは、それぞれの場所で、様々な問題に向き合う国内外の 10 名のアーティストと協働し、複数の文脈を展覧会場に運んでくることを企図しました。各アーティストは定住と放浪との間を様々なかたちで行き来する中で、グローバルな視点とローカルな視点を交差させながら制作を行っています。多様な仕方で場所の記憶や物語にアプローチする彼ら / 彼女らの芸術実践の中にこそ、捉え辛くなってしまった世界の様相を別の角度から見つめ直す手がかりがあるはずです。

本展が、未知なる誰か、そしてまだ見ぬ自分自身を迎え入れ、世界の新しい諸相を知ることができる場となることを願います。



1F

アーシャ・マラクリナ

1. ひび、「A room to rest」プロジェクトより、2016-2018、粗めの更紗、刺繍
2. クロック、「A room to rest」プロジェクトより、2016-2018、布、刺繍、刺繍枠
3. ハンモック、「A room to rest」プロジェクトより、2016-2018、布、綿ロープ
4. 道、「A room to rest」プロジェクトより、2016-2018、布、刺繍、めん棒

横山奈美

5. Flag of The United States、2021、麻布に油彩、2910 x 2182 x 53mm

鎌田友介

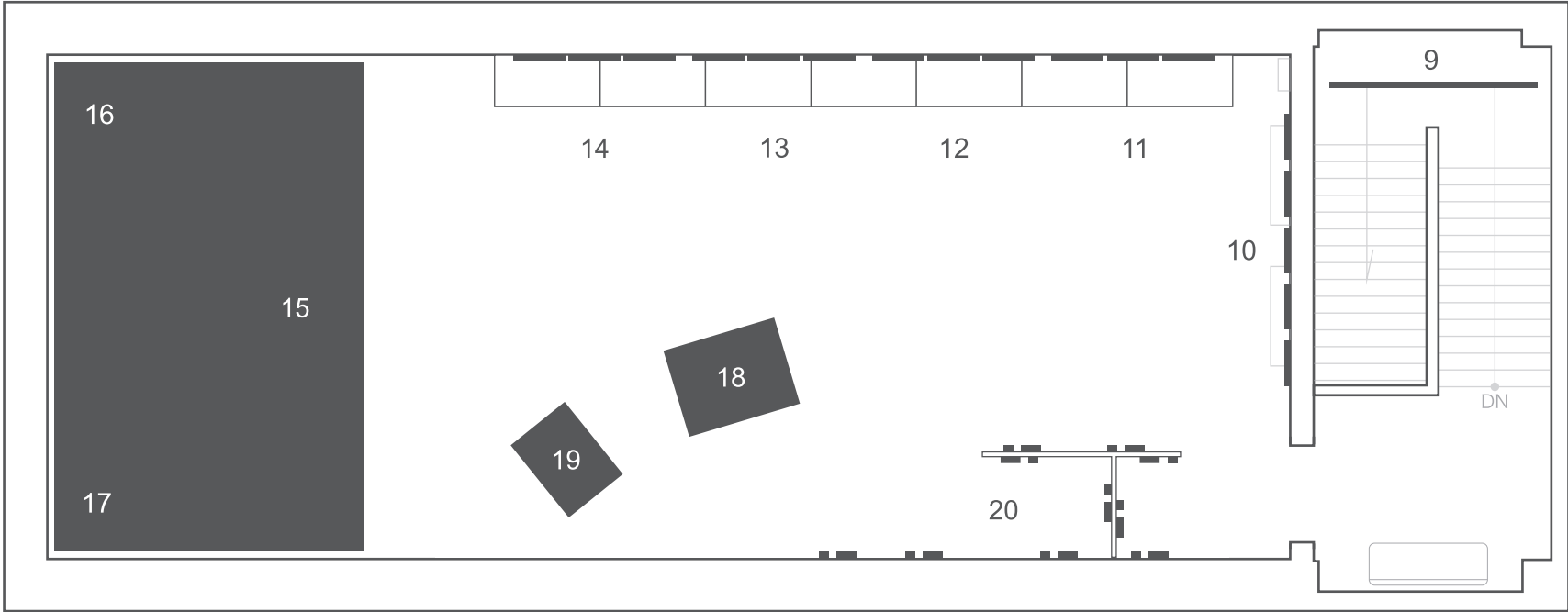
6. The House、2018、木材、韓国の日本家屋の木材、2 チャンネルビデオプロジェクション (6min x 2 チャンネル) (インスタレーション) 方眼紙、インクジェットプリント、インク (ドローイング)
ストラクチャー設計協力：原崎 寛明 / Hi architecture
ストラクチャー制作：椎橋 良太、小畑 祐也
フレーム制作：劉 功真
映像協力：Lee Jung Hum, Charlotte Raymond, Raymond Farm Center, Dongincheon Explorer
映像制作サポート：Asian Cultural Council, Pola Art Foundation

藤井光

7. 核と物、2019、ビデオ、47 分

スブツニ子！

8. Nanohana Heels、2012、ビデオ、51 秒



2F

蔡佳葳

9. Songs of Chuchepati Camp, Nepal,
In collaboration with Tsering Tashi
Gyalthang、2017、ビデオ、17分2秒

門馬美喜

10. Route 120 ヶ月、
2021、布、インスタレーション
協力：福島県立相馬高等学校
11. 相馬共同火力発電新地発電所 2021、
2021、アクリル、板
12. 原町火力発電所 2021、
2021、アクリル、板
13. 品川火力発電所、
2019、アクリル、板
14. 横浜火力発電所、
2019、アクリル、板
画材協力：ターナー色彩株式会社

遠藤薫

15. 閃光と落下傘、
2020、古布、古道具、山下清の複製画
【『山下清：作品集』（ダイレクトネットワーク、1999年）より1点、
その他1点】とペン画、インスタレーション
協力：慶野 結香（青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC] 学芸員）
16. 青森、八甲田山の花火、
2020、2チャンネルビデオ
撮影・編集：横山昌典（YOKOYAMA DESIGN WORKS）
17. 東京、江戸川の花火、
2021、ビデオ
撮影協力：大山日歩

イルーヤン・モンテネグロ

18. 版画作品と原版、「すべての女性を讃える心からの表現」シリーズより、
2019-2020、木版、ゴム版、リノリウム版、木材、ゴム、リノリウムブロック
協力：神戸アジアン食堂バル SALA
19. 多目的フード・カート（絵：アーティストによる図案化、カート：母親
や生徒たちと一緒に神戸アジアン食堂 SALA のためにつくられた）、
2019-2020

シルパ・グプタ

20. Untitled(No.1~No,10)、2018、トレーシングペーパー、木枠

1~4. アーシャ・マラクリナ Asya Marakulina (1988-)

アーシャ・マラクリナはサンクトペテルブルク（ロシア）を拠点に活動するアーティスト。彼女はアニメーション、グラフィック、テキスタイル、彫刻、インスタレーションなど幅広いメディアを用いて作品を制作しているが、その中でも刺繍は重要な位置を占める。彼女は「縫う」という私秘性の表現を用いて、静寂のうちに引きこもるための避難所をめざすかに見える。しかし実のところ、縫い描かれた絵画からなるインスタレーションは、まったく反対の印象を与える。《A room to rest》に架けられた糸による簡素なドローイングは、部屋に不穏な空気を充滿させるからだ。周囲のオブジェはシュルレアリスティックな変容をこうむる——時計やハンモックはわれわれをいささかも安堵させてはくれず、むしろ内なる恐怖や不安を呼び起こすものとなる。

5. 横山奈美 Nami Yokoyama (1986-)

横山奈美は西洋美術への憧憬と現実との間にある乗りこえがたい壁や葛藤に直面しながら、自己探求の旅を続けてきた。とりわけネオン管を描いたシリーズは、私たちの理想や願望と呼応するようにつくられている。ネオン管の背後で入り組む電線の入った台や黒いチューブは、絵画を支える構造の一部となり、私たちのありようの見苦しい部分を露わにしつつも、ネオンライトの美しさと対等に現れている。

6. 鎌田友介 Yusuke Kamata (1984-)

鎌田友介は、歴史や社会の状況を反映するとともに、国家の文化やアイデンティティ形成のツールにもなる建築をテーマに美術と建築を横断する活動を行っている作家である。近年は日本占領下の韓国や台湾で作られた日本家屋やアメリカ合衆国で焼夷弾実験のために作られた日本村の設計などの調査を通し、異なる歴史的背景と場所において日本家屋が孕んだ多様な意味を描き出すプロジェクトを手がけている。本展において再構築される《The House》のインスタレーションもまた、その木造建造物の背景にある複雑な文脈を芸術表現として鑑賞者に投げかけるものである。

※QRコード先より作家ステイトメントをご覧ください。

7. 藤井光 Hikaru Fujii (1976-)

藤井光は、綿密なリサーチやフィールドワークに基づくワークショップや「再演」といった方法で、社会問題への応答を試みてきた。「核と物」プロジェクト（2019）では、東日本大震災について、複数の専門家を交えたディスカッションを企画・撮影した。本展に出展される《核と物》はその映像を元に制作された作品である。ディスカッションでは、放射能に汚染された博物館の収蔵品＝「もの」を継承することの重要性和課題が浮彫りとなった。藤井は、領域横断的な対話を触発することで、わたしたちを新たな視座へと導く。

8. スプツニ子！ Sputniko! (1985-)

スプツニ子！はアーティスト、デザイナー、及び東京藝術大学デザイン科准教授である。本展に出展される《Nonohana Heels》は、靴デザイナーとのコラボレーションによって制作されたもので、歩くとヒールの先端から菜の花の種子が地中に植えられ、歩いた道に菜の花を咲かせるヒール靴の映像作品である。土壌の栄養素カリウムと共に放射性物質を吸収する働きがある菜の花は、震災後の日本の再生と復興のシンボルとされた。菜の花を植えることは最も効率的な問題解決の方法とは言えないが、人間とは異なる機能と時間性を持った菜の花は、別の角度から問題へと向き合い歩む方法を私たちに教えてくれるようだ。

9. 蔡佳葳 Charwei Tsai (1980-)

台北出身の蔡佳葳は、現在は台北を拠点に活動を行うアーティストである。初期の頃から現在に至るまで、彼女の制作活動は幼少期に仏教の古典文学を読んだ経験に基づいている。彼女の複雑な文化的信念、精神性や移ろいやすさについての絶え間ない瞑想が、彼女の作品を慈悲深く、精神的省察が込められたものになっている。映像作品《Songs of Chuchepati Camp, Nepal》の中で歌われる、2015年に起こったネパール地震の被災者の歌は、彼らが記憶しているネパールの伝統的な民謡、あるいは彼らの人生の物語に基づいて即興で作られたものである。歌の詩によって、形の無かった彼らの感情は形作られ、亡命者の経験は内省的な人間の欲望を通して共有されることになる。

10~14. 門馬美喜 Miki Momma (1981-)

福島県相馬市出身の門馬美喜は、2013年に東日本大震災の影響で止めていた美術制作を再開し、2020年にJR常磐線が再開通するまで鉄道不通の東京～相馬間を100回以上行き来しながら、現在も福島県沿岸部を中心に目にした風景を描くRouteシリーズの制作を続けている。本展ではRouteシリーズから《横浜火力発電所》《品川火力発電所》《原町火力発電所 2021》《相双共同火力発電所 2021》の4連作、および、いまその場所で生きている生徒たちの声が綴られた《Route 120 ヶ月》が展示される。彼女の作品と対峙したとき、私たち鑑賞者はその風景がこの世界に確かに存在しているのだという事実を知るだけではなく、断片的に描かれた一本の道の先で生活続ける人々の物語と、そこで人々が歴史や自然と関与しながら生きてきた時間の流れを、絵画を見る経験の中で感じられるだろう。

※QRコード先より作家ステイトメントをご覧ください。

15~17. 遠藤薫 Kaori Endo (1989-)

遠藤薫は様々な土地のリサーチや作品制作を通じて、複雑に絡み合う「社会」と「工芸」の関係を紐解き、編み直す。本展の《閃光と落下傘》は、第二次世界大戦の徴兵を逃れるため放浪をはじめたとされる画家・山下清の「みんなが爆弾なんかつかうらないできれいな花火ばかりをつくっていたら、きっと戦争なんか起きなかったんだな」という言葉に触発されて制作された、戦争と花火に関するインスタレーションである。本展では、昨年青森国際芸術センターで展示された作品を1945年東京下町に大きな悲劇をもたらした東京大空襲を手がかりとしながら、空襲から76年目の3月10日に山下清の《江戸川の花火》の舞台である江戸川で撮影された映像作品や、山下清の描いたイメージと共に、東京の持つ戦争の記憶と結び付けながら再構成する。

※QRコード先より作家ステイトメントをご覧ください。

18-19. イルーヤン・モンテネグロ Yllang Montenegro (1981-)

フィリピン共和国イロイロ市出身のイルーヤン・モンテネグロは、フェミニスト、アクティヴィスト、独学のアーティストであり、かつては日本の移民労働者でもあった。2020年、コロナ禍において、彼女は自身やほかの移民女性を支援するため、神戸のNPO／レストラン「神戸アジアン食堂バル SALA」と協力して、版画を販売し資金を集めた。これらの作品には、遠い母国のパンデミックを目の当たりにした彼女の夢や恐怖があらわれている。不安やおたけび——それは、彼女と同じように遠い家族を想う、何百万人もの移民たちと共有されるものだ。彼女は、周縁から／のために声を上げる女性の抵抗と脆弱さを刻銘に描く。版木を彫るその手が、じぶんと同じような彼女たちを勇気づけると信じている。

20. シルパ・グプタ Shilpa Gupta (1976-)

インド・ムンバイ出身のシルパ・グプタは、国家や宗教が人の価値観に及ぼす影響などをテーマに、インスタレーションを主軸とし、ドローイング、刺繍、ネオンなどの作品を展開する。本展に出展される《Untitled》(2018)は、ドローイングと詩の一対が計10点で構成される。ドローイングでは、自由に思想を表現することが許されず、当時の権力者に捕らえられ監獄へと追いやられてしまった詩人が主に描かれている。詩の一節は、18世紀から現代にかけて書かれたものの中から選ばれており、彼らが捕らえられた日付も記されている。詩人の体の一部がところどころ意図的に描かれていないその様子は、まるで思想の自由が保証されていると安心している私たちにも警笛を鳴らしているようだ。

主催：東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻
共催：一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン
助成：藝大フレンズ
協力：KENJI TAKI GALLERY、画材協力：ターナー色彩株式会社
企画：東京藝術大学大学大学院国際芸術創造研究科
アートプロデュース専攻キュレーション領域 修士課程在籍生
長谷川祐子教授授業科目
「アートプロデュース演習：キュレーションI」履修生＋聴講生

監修：長谷川祐子 [東京藝術大学教授、東京都現代美術館参事]
共同キュレーター：Kawthar Alzaid / Yang Fang / Ekaterina Kuzmina / 松江李穂 / 中谷圭佑 / Ness Roque / 福士弥華 / 渡辺俊夫 / 中本恵利
視覚デザイン：曹語宸
ウェブデザイン：林裕人